

SHUNKEN 2002-07 30-02



駿建

2002年夏期号 Vol.30 No.2 日本大学工学部建築学科 日本大学短期大学部建設学科

君は建築人として21世紀をどう生きるか

片桐正夫

歴史上の人物評価の時、よく「生まれあわせた時代」との関連で語られることがある。もし、彼（もしくは彼女）がもう少し違う時代に生まれていたら歴史もその人の運命ももっと違ったものになっていたのではなかろうか、などのように。

ところで、皆さんは自分の人生をどんな姿にしようと考えているのでしょうか。第一線で活動する時間にして30年から35年の生きかたについてです。

歴史上の有名な人ならずとも、これからの30年から35年の世界や日本の時代を、大きくどうとらえるかを考えることは、人生にとって、とても重要なことではないでしょうか。

つまり、世紀の変革期の時代に生まれがいのある人生を生きようと考えているのであれば、建築界の姿をどのようなものと考えるかが、重要となりましょう。

ここで年の功から私見を申し上げて皆さんの考えを聞きたいと思います。

ひとつは、経済活動の一層のグローバル化現象の進む中での建設界のあり方についてであります。個人レベルでいえば、資格の国際化への対応をしなければならなくなるであります。組織、企業レベルでは施工、設計などの分野の国際化と、先端開発技術の特許権による商品化の一層の促進であります。

具体的にはアジア圏（含東南アジア）での仕事を手掛ける方向で日本の建設界が生きてゆくことになるのではないかと思います。永らく云われてきたことですが、建設業は農業同様に第一次産業であり、従って全くの国内産業の部類に属する業であること。

しかし、今日この考え方は過去のものになるようになっていきます。これまで貯えてきた日本の高い技術力が、アジア圏で商品価値を認識されています。単体の設計や再開発のノウハウも評価され、仕事の場を広げつつあります。この方向が一層拡大してゆくとしたら、成果をあげるために、個人と組織に前述の努力が求められるでしょう。

もう一つは、人間の営みに必要なあらゆる分野の技術が相互に非常に密接な関連をもってゆくことが、不可欠な状況が進んでゆくであろうということです。

学問研究の領域では、学際的という言葉が定着しておりますが、これが実生活や技術の面にも及んでゆく傾向にあります。このことは皆さんの日常生活でも感じているでしょう。建設界も例外ではありません。

例えば私達の研究室、建築史の分野でも、これまでは研究結果を世に送り出すことと文化遺産の保護を実践することで役割の大半は済んでいたのですが、近年は、将来の都市景観の問題や既存建造物の再生・再活用などのいわゆるリサイクル型社会への対応や、広い意味での資源・環境問題とのかかわりも必要となってきました。

この中では例えば保存科学に関する問題から、材料学、構造力学、耐久性を高めるための科学物質の応用、修復施工技術の開発、等々かつての建築史では全く関連を実感することのなかった分野との共同研究や作業が必要になってきました。弱体化した古い木材の補強のために見えないところに炭素繊維をはさみ込む手法などのように。

また、建築の設計に至る以前の企画から設計までの段階でも、新しいマネージメントやシステムエンジニアリングなどの方法を取り入れて、それらをより合理的で適正な建物を創ることに役立ててゆくなどの手法もますます進化してゆくでしょう。

こうした観点に立って考えてみると、今後の我国建設界では、職域はアジアの各国に拡大し、職能は既存の狭い建築専門家としての分野だけでなく、もっと広く他分野との係わりの中で仕事をしてゆく専門職（システム開発のためのマネージャーなどのように）の開発、すなわち職能域の拡がりが進むことになりましょう。

在学中に皆さんにはぜひ、将来を見とおして自分をおのような場で生かしてゆくかという理念のもとに、戦略をたて、学んでいただきたいのです。

（かたぎりまさお・教室主任・教授）

学生による 授業アンケート調査について

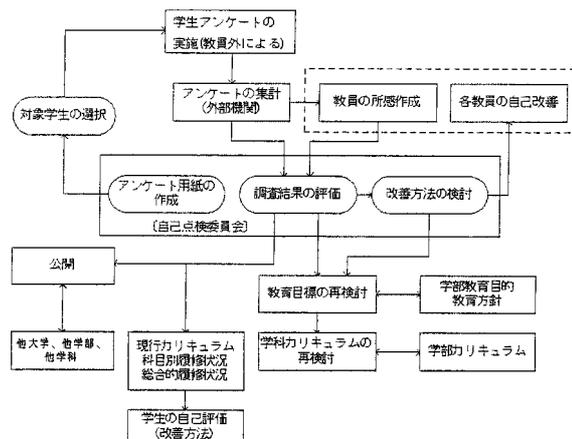
片桐正夫・井上勝夫

本年前期から表題の「学生による授業アンケート調査」が、理工学部全体に渡り、正式に開始されることとなりました。このアンケート調査は、今後の授業の方法や内容の見直し・改善、学生各自の学習に対する自己評価・意識向上等に役立てることが主目的であり、授業の効果を最大限引き出すためのものです。よって、アンケート調査の回答には、各自積極的に参加するとともに真剣に記入していただきたいと思ひます。特に自由記述欄については、担当教員に直接手渡されることとなっているため、大きな効果が期待されますので、どんなことでも結構ですから、是非記入するよう心掛けてください。

アンケート項目は表に示すように20項目ですが、内容を目的から分類すると3つに区分されています。一つは学生諸君の自己点検・評価に関すること、二つ目は教員の授業の方法・内容に関すること、三つ目は授業環境(教室及び設備)に関することです。アンケート項目については、国内の他大学における実施例や海外の事例等を参考として検討した結果決定されたものです。また、調査結果は後日、学生各自が閲覧できるように公表される(公表方法については現在検討中)予定ですので、自分自身の自己点検・評価結果を全体集計結果を比較し、今後の学習方法に役立てていただきたいと思ひます。なお、教員の授業方法・内容等に関する集計結果は、各担当教員に報告され、今後の授業方法等の改善に役立てられることとなっております。当然、教室環境に関する結果も施設・設備の充実化への生の声として纏められ、より良い環境整備が検討されることとなっております。

学生諸氏も既に知っている方が多いと思ひますが、昨年度、当建築学科は国内の建築系大学の中で最も早く「JABEEによる試行審査」を受けました。その中でも、学生による授業アンケートに基づく継続的教育改善システムの構築・活動は、共通審査基準項目として位置付けられており、重要な判定基準となっております。図に現在、当建築学科で考えている「学生・教員の自己点検システム(案)」を示しました。

このような授業アンケートは、国内でも多くの大学で行われつつあり、カリキュラムの検討や授業方法等の改



授業に対する学生、教員の自己点検システム

【授業全体】	全く(1)	やや(2)	普通(3)	まあまあ(4)	非常に(5)
1 この科目で目標とされる最小限の学力が身につきましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
2 この科目に興味を持ちましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
3 授業はラバパスに身について行われましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
4 授業内容に対する授業時間は十分だったと思ひますか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
5 学んだ知識は今後役に立つと思ひますか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
【教員について】	全く(1)	やや(2)	普通(3)	まあまあ(4)	非常に(5)
6 分かりやすく丁寧に授業をされましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
7 黒板やOHPなどの使い方は適当でしたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
8 よく準備して、熱意を持って授業を行っていましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
9 学生との間にコミュニケーションが盛り立っていましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
10 授業が熱意に運ぶよう努力しましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
11 無断休講は無く、休講の場合は補講を行っていましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
【学生自身について】	全く(1)	やや(2)	普通(3)	まあまあ(4)	非常に(5)
12 真剣に学ぼうと努力しましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
13 授業に関する質問を行いましたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
14 あなたにとって授業の難易度は適切でしたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
15 レポートなど授業時間外の課題を提出しましたか?	100-90%	89-80%	79-70%	69%以下	回答なし
16 授業への出席率はどうでしたか?	100%	99-90%	89-80%	79-70%	70%以下
【教室の環境について】	非常に(1)	まあまあ(2)	普通(3)	やや(4)	全く(5)
17 教室のサイズは授業の進め方に適したものでしたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
18 授業の内容に対して受講者人数は適当でしたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
19 教室の椅子、机、黒板、情報機器などは授業活動に適当でしたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)
20 教室の照明(自然照明、人工照明)や温度は適当でしたか?	(A)	(B)	(C)	(D)	(E)

授業アンケートの質問項目

善、施設拡充等に利用されようとしております。ただし、この授業アンケートは、教員の人気度をチェックしたり、学生評価を行ったりするものではないことを認識しておいてください。あくまで、各授業の目的である「多様な学生諸君の個性を最大限引き出し、伸ばすこと」、「統一した授業を行うようにするのではなく、各授業が特色ある興味を引く授業になるようにすること」、「理解度の上がる授業の方法へと改善すること」などを実現するための手段として利用することであることを認識しておいてください。授業は学生と教員が一体となって、作り上げるべきものです。どうか、その実現に向けて真剣に回答していただきたく思ひます。

なお、アンケート調査は全ての科目について行われるものではありません。本年度は、科目担当教員の判断で行われます。また、各科目とも前期授業の最終日を目安として行います。

(かたぎりまさお・教室主任・教授、いのうえかつお・学務副委員長・教授)

西合志町保健福祉センター

くまもとアートポリス事業参加作品

今村雅樹



ホール内観

地域施設として

この建築は、福祉系の施設が地域施設と一体となった21世紀型の日常的なコミュニティコンプレックスである。

「デイセンター、保健センター、子供センター、福祉支援センター、地域交流ホール」の5部門が一つの空間の中で有機的に繋がり、多世代の様々な人々の交流が自然に行われるように、空間を流動的に繋げ、ゾーンを形成するように計画している。

地方に建つ地域施設は、車によるアプローチがほとんどであるため、ここでは利用目的によるアプローチを大きく2つに分け、動線の混乱をなくすように計画している。その2つというのは、自分で車を運転して来る人とケアが必要で送迎される人に分けている。館内は高齢の利用者にも分かりやすいように、案内サインも大きくグラフィックとしてデザインしている。休んだり話したり疲れたときには寝ころんだりできるようにいるんな形のベンチをゾーンの合流・分節点に設け、廊下がリビング的なホールとなるようにしつらえている。

明るく気持ちの良い空間が住民の「たまり場」となるように、福祉や住民の関係代表者と検討委員会を構成し、意見をワークショップで取り入れ、勉強会を重ねながら計画された。細長いZ形の敷地をいっばいに使いながら、北から南へ向けて利用者の活動の軽いものから重いもの（介護が必要なもの）へと、グラデュエーションゾーンングを行っている。

開きながら閉じる / トラベリングからドリフティングへ

以前設計した「太田市総合ふれあいセンター」(1999竣工)では、地域住民の交流を図るために、空間を「開いていくこと」を中心に計画し、施設に直接目的がない人も「通り抜け」することで情報を得られるようなスピード感のある「トラベリング」という概念をデザインに採り入れた。

しかし、今回は福祉系の目的性が強い人達が利用する施設となっている為、そのような中でもスローな河の流れのようなアクティビティを「ドリフティング(漂わせる)」と言う解釈のもとに、空間化を試みている。

インテリアは、「太田総合ふれあいセンター」の時に多用されたガラスの間仕切り壁や「見る見られる」の開放型しつらえとは異なり、厚いコンクリートの壁が中心となりそれぞれのプライバシーを守りながらも、どこか外部と繋がる「開きながら閉じる」「閉じながら開く」手法を採り入れている。

各ゾーンを緩やかに繋いでいるのは、子供と地域住民交流の「あそび庭」、竹を配しボランティアや保健介護の人達の憩いの場としての「光庭」、デイケアを利用する老人達の緩やかな動きのための「デッキ庭」の3つの中庭であり、様々な人のスローなシーンを誘発するように計画している。

分断されながらも連続する構成体

建築は敷地形状いっばいに建てた平屋(バリアフリーを重視)のため、田園地帯にぼつんと建つ建築にしては、内部空間から創り出されたデザインとなっている。

湾曲した壁は、各ゾーンとパブリックスペースを細胞膜のように有機的に内と外を結び役割を果たし「ドリフティング」を可能にする。またこの内部の道空間は、広がったり狭まったりして空間の前後のシークエンスを創り出し、熊本城の城壁の間を歩いているような「切り通し」的な空間と相まって、様々な方向から入ってくる光に導かれながら無意識に外部に繋がった5つのエントランスを結び動きを誘発するように設計している。

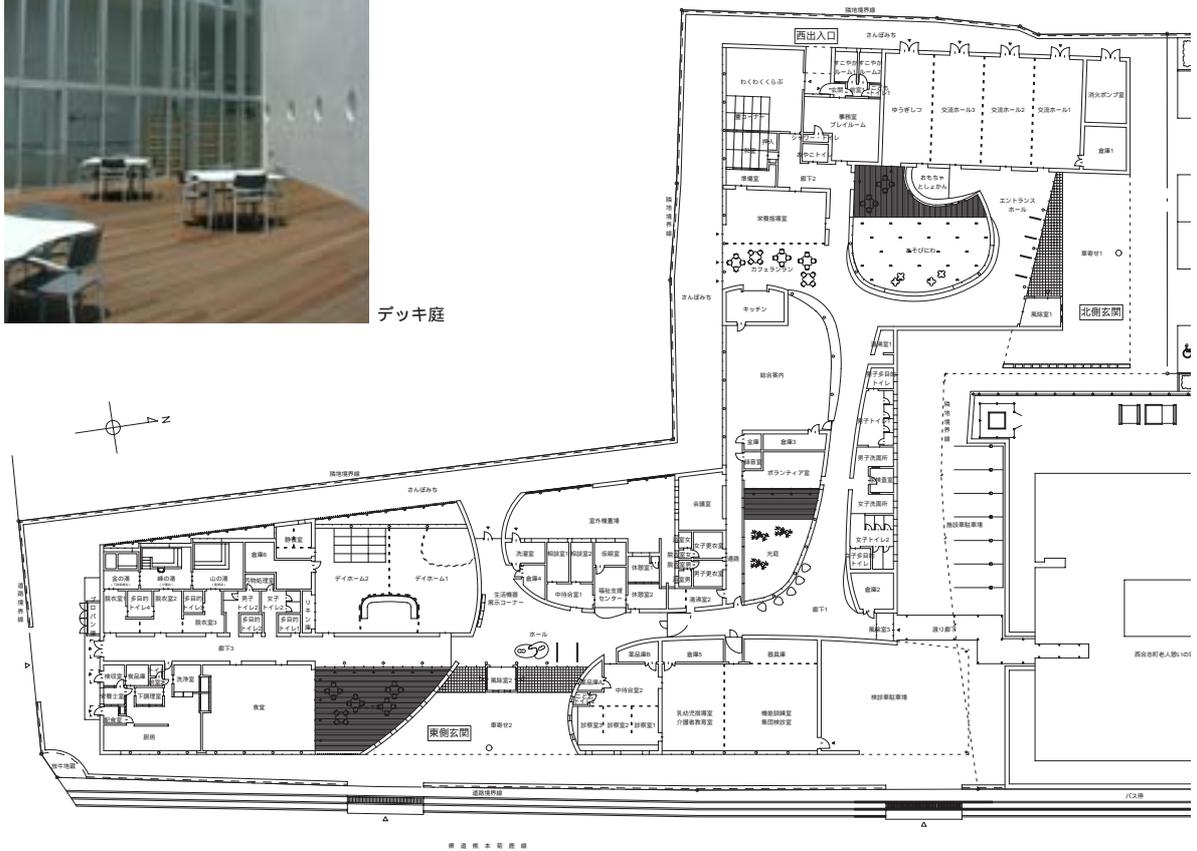
立面形も内部を同じように各ゾーンの開き方により作られる「分断されながらも連続」している壁によって構成され、各面によって全く違った表情を作りだしている。

(いまむらまさき・助教授)

西合志町保健福祉センター「ふれあい館」
設計 / 今村雅樹アーキテクト・田尻設計 設計共同体
構造 / TIS & PARTNERS
敷地面積 / 5,447.94m²
建築面積 / 3,385.84m²
延床面積 / 3,057.95m²
階数 / 地上1階
構造 / 鉄筋コンクリート造(耐震壁付ラーメン構造)
工期 / 2001年7月 - 2002年4月



デッキ庭



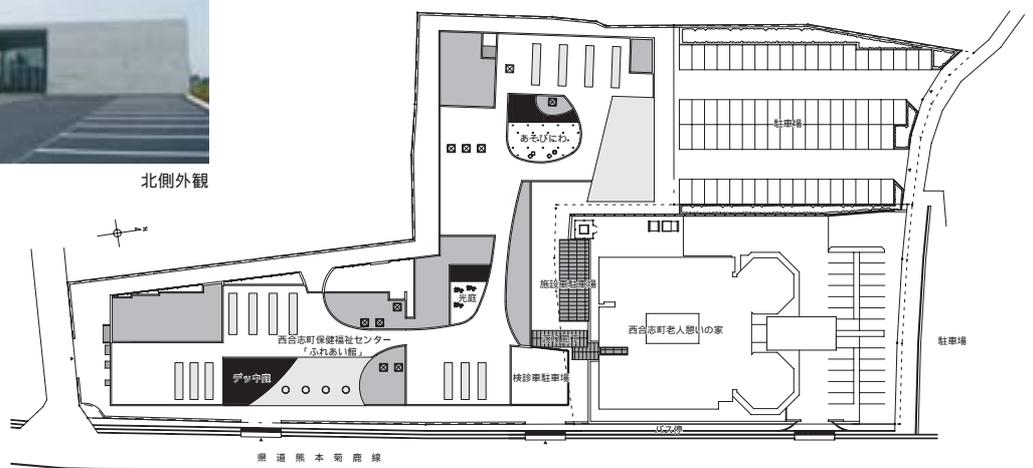
平面図 1 / 800



断面図 1 / 800



北側外観



配置図 1 / 1500

新1号館建設工事見学会

市川雄一・杉本直之

現在、着々と工事が進んでおります駿河台校舎の新1号館ですが、建築学科の学生を対象とした現場見学会が5月12日に行われました。日曜日にも関わらず約100名の学生が集まり、来年4月にお披露目される新校舎に期待をよせていました。工事の進捗状況は、躯体工事がほぼ完了した段階でしたので、今回は構造系の大学院生2人に見学会の感想を報告してもらいました。

初めて1号館を訪れたのは大学入試の時だった。その時の自分にとってはただの試験会場でしかなく、レンガの外装とポインテッドアーチが重々しく感じた。それ以降、使用する機会はあまりなかったが、今回1号館建て直しの現場を見学する機会に巡りあえた。現場は、主構造が出来上がった状態で鉄骨はオレンジの錆止めをしていた。授業で聞くだけであまり見ることがない、制震装置のトグルが所々についていた。トグル装置は、地震が来ても油圧ダンパーの部分で地震エネルギーを吸収するため、主構造の安全性を確保するといったものであった。

研究室柄か、特に印象的だったのが、講堂の屋根である張弦梁である。張弦梁は、建物の付加荷重に対してH型鋼の梁が撓むのを弦材であるストリングと束で押し上げ剛性を付加するといったものである。普通の梁と比べ



見学会風景

ると断面が少なくすむが、講堂の全ての梁に使われているわけではなかった。見えないところなのでコスト的にH型鋼が使われていると思ったが、現場の人の説明では、張弦梁を普通の梁と比べると断面が少ないため水平荷重に対して剛性が低くなってしまふ。このため、大梁はH型鋼が使われている。こうした骨組みは仕上げ材が張られる前でしか見えなく、授業だとあまり触れられることがないため、とても勉強になった。

(いちかわゆういち・斎藤研 M1)

工事中の建築物に入ることは普段体験できるものではなく、新1号館の現場見学に参加し、実際に建設中の建物の構造に直に触れることができたことで、普段の講義とは異なる貴重な体験をすることができました。新1号館では、建設地盤の影響から免震構造ではなく制震構造を採用しており、トグル制震装置を取り付けることで、新1号館は制震構造においては世界最高の対地震性能を有している建築物のひとつであると石丸先生が説明されていました。そのトグル制震装置は、この原理を利用して建物に伝わる地震力をオイルダンパーなどのエネルギー吸収装置に伝達することで、非常に小さなダンパーで大きな減衰効果を発揮することができる効率的な装置であることは授業で学んでいましたが、実際に取り付けられている装置を見ると、通常の高層建物にブレース型に設置されているオイルダンパーに比較してかなり小さなダンパーで構成されていることが良く理解できました。また、地震発生後には劣化したエネルギー吸収装置の交換を行うことで建物の性能が蘇りますので、地震国日本においても長寿命建築物を実現できる可能性があると思いました。

日常の研究室生活で勉強している制震装置が、これから私たちが学ぶことになる校舎に取り付けられている姿を目の当たりにして、感動すると同時に更なる研究意欲が湧いてきました。今後このような建物が多くなれば、スクラップアンドビルドの思想は消え去って、地球全体の環境問題にも貢献できると感じました。

(すぎもとなおゆき・石丸研 M1)



張弦梁構造



地震時の揺れを軽減するトグル制震装置



床振動を抑制するTMD制振装置

都市開発の実務から

大貫達雄



建築という言葉については、単純に建物を建設する為の行為、即ち設計と施工のこと。設計には意匠・構造・設備があり、施工には建築と設備があり、これが建築の全てと思っていた。これは入社して工事を担当している時のことで、都市開発業務を担当してみると、建築というものは非常に幅の広いものであることがわかり、これまでの自分に恥ずかしさを感じた。建設する（ハード面）と、その施設がどのように機能し、運営されていくのか（ソフト面）までの全てが建築である。建物は生き物である。生き生きと育てねばならない。その為には正しい事業計画をたてねばならない。事業成立の為の三要素と言われるものに、人・物・金がある。人：企画力・物：土地・金：資金力である。この三つがそろって始めて事業が成り立つのである。しかしこの三要素がそろえることは非常にむずかしい。これらを満足させる為に、企画力については立地調査から事業計画までのことを、土地については購入・賃借等の斡旋仲介までを、また共同ビル（再開発事業等）における土地のまとめ作業までを、資金力については銀行からの借り入れ（担保力共）方法等を、また最近では証券化手法の活用方法等を、それぞれ各専門家の力を借りて解決しなければならない。各専門家には建築士・弁護士・税理士・不動産鑑定士・宅地建物取引主任者・再開発プランナー・商業コンサル等がおりま

す。これらの各専門家と調整を図りながら事業化する為には、コーディネーター能力が必要になってくる。その為には幅広い知識と豊富な経験が必要である。建築の知識のほかに法律（民法等）・税務・不動産・施設の業種業態・都市の特性・交通・環境・ビル管理等の基礎知識が必要である。この分野は大学にも是非必要だと思っていた時、昭和60年日本大学の建築学科のなかに企画経営コースが設立された。このコースは不動産学というものを教育に取り入れて、この分野の発展に先がけたものであった。平成4年には大学院に不動産科学専攻が開設された。現在はこの分野の卒業生が各方面で活躍されている。都市開発関係の業務は、今では当然のように思われるが当時としては画期的なことであり、また建築学科の中に設置したこともすばらしく敬意を表したい。昨年より非常勤講師としてこの分野のお手伝いができ誠に光栄である。学生諸君にはこれまでの実務の話を取り入れながら講義を進めていきたい。

（おおぬきたつお・非常勤講師）

筆者略歴

- 1940年 栃木県生まれ
- 1963年 日本大学理工学部建築学科卒業
- 1963年～1999年 大成建設株式会社勤務
- 1999年～2002年 大成サービス株式会社勤務



張弦梁構造



地震時の揺れを軽減するトグル制震装置



床振動を抑制するTMD制振装置

都市開発の実務から

大貫達雄



建築という言葉については、単純に建物を建設する為の行為、即ち設計と施工のこと。設計には意匠・構造・設備があり、施工には建築と設備があり、これが建築の全てと思っていた。これは入社して工事を担当している時のことで、都市開発業務を担当してみると、建築というものは非常に幅の広いものであることがわかり、これまでの自分に恥ずかしさを感じた。建設する（ハード面）と、その施設がどのように機能し、運営されていくのか（ソフト面）までの全てが建築である。建物は生き物である。生き生きと育てねばならない。その為には正しい事業計画をたてねばならない。事業成立の為の三要素と言われるものに、人・物・金がある。人：企画力・物：土地・金：資金力である。この三つがそろって始めて事業が成り立つのである。しかしこの三要素がそろえることは非常にむずかしい。これらを満足させる為には、企画力については立地調査から事業計画までのことを、土地については購入・賃借等の斡旋仲介までを、また共同ビル（再開発事業等）における土地のまとめ作業までを、資金力については銀行からの借り入れ（担保力共）方法等を、また最近では証券化手法の活用方法等を、それぞれ各専門家の力を借りて解決しなければならない。各専門家には建築士・弁護士・税理士・不動産鑑定士・宅地建物取引主任者・再開発プランナー・商業コンサル等がおりま

す。これらの各専門家と調整を図りながら事業化する為には、コーディネーター能力が必要になってくる。その為には幅広い知識と豊富な経験が必要である。建築の知識のほかに法律（民法等）・税務・不動産・施設の業種業態・都市の特性・交通・環境・ビル管理等の基礎知識が必要である。この分野は大学にも是非必要だと思っていた時、昭和60年日本大学の建築学科のなかに企画経営コースが設立された。このコースは不動産学というものを教育に取り入れて、この分野の発展に先がけたものであった。平成4年には大学院に不動産科学専攻が開設された。現在はこの分野の卒業生が各方面で活躍されている。都市開発関係の業務は、今では当然のように思われるが当時としては画期的なことであり、また建築学科の中に設置したこともすばらしく敬意を表したい。昨年より非常勤講師としてこの分野のお手伝いができ誠に光栄である。学生諸君にはこれまでの実務の話を取り入れながら講義を進めていきたい。

（おおぬきたつお・非常勤講師）

筆者略歴

- 1940年 栃木県生まれ
- 1963年 日本大学理工学部建築学科卒業
- 1963年～1999年 大成建設株式会社勤務
- 1999年～2002年 大成サービス株式会社勤務

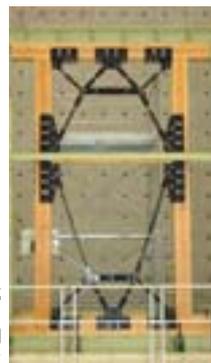
対震構造研究室

石丸辰治教授，石垣秀典助手

東 義敬

本年度の対震構造研究室の学生スタッフは，M2が4名，M1が5名，卒研生が10名で，石丸教授の（愛情のこもった）厳しい指導のもとで日夜勉学に励んでいます。「対震」という言葉は，石丸教授が独自に考えられた言葉で，一般的には「耐震」という漢字が使われるのですが，「耐震」という言葉では地震動に対して耐え忍ぶというような受動的な印象を与えがちなので，免震構造や制震構造などの積極的に地震エネルギーを吸収するような構造物全般を表し“地震に対処する構造”という意味で「対震」という漢字を用いています。

このような研究室の名称からすぐに分かるように，研究の内容としては新しい免震・制震装置の開発や，それらを設置した構造物の設計法などに関する研究が中心となっています。石丸教授の考案されたトグル制震装置は，駿河台新1号館や船橋8号館をはじめ，多くの建築物に採用されています。装置の開発を行う際には，船橋校舎の「環境・防災都市共同研究センター」の設備を使用して，実大規模での振動実験を実施します。この施設では，管理者の秦一平さんが優しく指導をしてくれますので，卒研生は実験に参加しながら研究を積み重ねて，卒業論文としてまとめあげることによりめでたく卒業の運びとなります。昨年度に実施した大規模な実験を挙げてみますと，6月に摩擦型亀壁の実験，8月に張力導入型トグルの実験，12月には改良版張力導入型トグルの実験，2月にはゴム球免震住宅実大振動実験を行いました。また，昨年は実験だけでなく，新しく開発した亀壁と張力導入型トグルが愛知県の社寺建築物の改修工事に採用される



張力導入型トグル制震装置



亀壁制震装置

ことになったので，卒研生に現地に出張してもらい，大工さんの中に混じって設置作業を行っていただきました。現地では，なかなか図面どおりに設置することができずに頭を抱えたようですが，解析を行って装置を設計し，実験により性能を確認，さらには施工まで行うことができたのですから，非常に貴重な経験を積むことができたのではないかと思います。

また，研究室では夏と春に合宿を行っています。場所は毎年異なりますが，車と温泉が大好きな石丸教授先導のもとで，昨年は夏に裏磐梯，春は伊香保まで車を連れて行ってきました。合宿中1日くらいは勉強会も行いますが，その後は石垣助手の指導のもとで…。良く学び，良く遊び，良く食べ，良く飲む（？）が研究室のモットーだと思います。

（あずまよしたか・石丸研 M2）



ゴム球免震住宅振動実験



卒研生によるトグル制震装置施工状況



平成13年度春合宿（伊香保温泉にて）

建築史・建築論研究室

片桐正夫教授，大川三雄専任講師

重枝豊専任講師，浜嶋一成短大非常勤講師

重枝 豊

建築史・建築論研究室では、片桐正夫教授，大川三雄専任講師，重枝豊専任講師，浜嶋一成・短大非常勤講師が指導にあっている。研究するテーマによってアジアゼミ，日本ゼミ，近代ゼミに分かれているが，相互に連絡を密に取りながら，ゼミナールや卒研指導を実施している。研究の中核にはオーバー・ドクター1人，博士課程後期2名，同前期11名の院生がいる。

アジアゼミでは，カンボジアのクメール遺跡を中心に，レンガ造，石造遺跡の平面分析，施工手順，構造解析などを行なっている。調査はカンボジアだけでなく，ラオス，タイなどに散在するクメール遺跡もその研究対象に含めている。また，片桐教授を委員長とするアンコール・ワット西参道修復プロジェクトが進行しており，研究室の大学院出身の先輩が修復の監督と指導をしている。カンボジアでは修復作業にもかかわらず，調査・研究を深めている。

その他に，中国，韓国，カンボジア，ベトナムなどの歴史的建造物のデータベース化プロジェクト（文部科学省・オープンリサーチ研究助成）も進行しており，アジアの情報拠点構築を目指している。

ベトナムに関しては，重枝専任講師によってチャンパ遺跡，仏教寺院，民家などの調査を進めている。日本建築史研究に関しては，浜嶋一成（非常勤講師）が参画し，片桐教授と共同で調査・研究を実施している。

主なテーマは，1．カンボジア・アンコール・ワット西参道に関する研究，2．クメール建築の変遷に関する史的研究，3．中国の建築史に関する研究，4．韓国の建築史に関する研究，5．インド建築に関する研究，6．日本建築史に関する研究，7．国内外の町並み保存に関する研究などである。

以上のような従来の建築史研究に加えて，これまで20年以上にわたって関わってきた文化遺産の保存事業（古民家，社寺，城郭建築，近代R.C.造建築など）に関するテーマに力を入れている。このテーマは，1～7までの研究テーマと異なり，多くの他分野の研究者との共同研究を必要とする学際的研究である（材料学，保存科学，構造力学，地質工学，施工法等々）。さらに，その結果と

卒研究生と院生が参加して行なわれるカンボジアでの調査



建築学科主催で毎年実施されている関西研修旅行



して，実践的な作業をとまなうきわめて現実性の高い研究である。

このテーマは，時代の要求として建築界にも求められている環境や資源の有効活用に応えることにつながっている。これまでの建築史の役割を広げて，時代の要請に応える最重要なテーマと位置づけに注目している。

建築史・建築論研究室の近代班（大川ゼミ）では，人物，社会，建築，環境，運動，出版など様々なテーマ設定のもとに“建築における近代とは何か”について考察することを主眼としている。

中でも，ここ数年の主軸テーマは，「モダニズム研究」と「近代和風研究」である。前者は，今日の建築の主流となっているモダニズム建築を，その発生時まで遡って，再評価を試みる作業で，DOCOMOMO（ドコモモ）というモダニズム建築の記録・保存を目的とした世界的組織の活動の一環でもあり，当研究室が，会員向けの「DOCOMOMO ニュースレター」の編集室を兼ねている。また，より具体的には，「鎌倉近代美術館」保存のために設立された「近美100年の会」の会報『小さな箱，大きな声』の編集も行っている。

もうひとつの近代和風研究とは，日本における近代化過程を“洋風化”ではなく，“和風”の側面から捉え直す作業である。従来は，作家研究が中心であったが，今年から2年間にわたり，千葉県立現代産業科学館からの依頼により，文化庁補助事業としての千葉県近代和風建築総合調査を担当することとなり，フィールドワークとデスクワークの両面からの研究を進めていくことになっている。（編集：しげえだゆたか・専任講師）

新任非常勤講師紹介

桑原立郎先生
(建築設計Ⅰ,Ⅲ)



野火止の家



設計の課題においては、受け身の姿勢では、何も得るものはありません。自らアクションを起こさない限り、誰も何も教えてはくれない。これは、卒業して社会で仕事をするときと同じです。そのかわり、積極的に課題に取り組む人にとっては、貴重な経験と多くのチャンスを得ることができるでしょう。そういう学生は、私にとっても大変刺激になるので、楽しみながら、とことん付き合っていきたいと思っています。

近藤康弘先生
(デザイン基礎Ⅰ, 建築設計Ⅱ)



ミラノ工科大学



現在は組織事務所に所属し、私自身の仕事の多くはプロポーザルやコンペが多く、3年前ミラノ工科大学の国際コンペにて1等を受賞し、今年ようやく実施設計が終了するところです。渋谷の東急BUNKAMURAの設計が11年前に竣工し、その際知り合ったフランスにおいて活躍する多くの建築家やデザイナーはじめ多くのコラボレーターを通じ、建築の面白さを感じています。皆さん、にこれからの設計において多様化した個人のスキルの必要性と同時に変わることのない設計の原点を伝えていきたいと思っています。

田中雅美先生
(デザイン基礎Ⅱ, 建築設計Ⅲ)



太田市蕪川地区行政センター



大学教育期間中に、学生として学ぶべきことの第一は、「建築の奥深さを知る」すなわち、建築を通して建築空間の美しさやおもしろさを感じ取れる力、設計者の意図やその背景にある社会性や時代性を察知できる思考力や感性を身につけることだと思う。これは実際に設計課題をやる中で自らが覚醒し、その実力を養っていけるものだ。課題を通して学生諸君にはぜひ、建築設計の広がりや深さを体感し、自らを奮い立たせてほしいと思う。

安田博道先生
(デザイン基礎Ⅱ, 建築設計Ⅰ)



静岡の家・縁側



設計をしているとき思うことがあります。いろいろな条件に制約されて不自由に思ったり、時にはアイデアを実現するために苦い思いをすることがあるのに、何故また模型の前で新しいアイデアを考えているのかと。結局考えることが好きなんですね。今まで誰も思いつかなかった事を考え、それを実現することが喜びなんです。

葭内博史先生
(デザイン基礎Ⅱ, 建築設計Ⅲ)



東京理科大学
情報メディアセンター



設計をする時、多くの人と語り合うことの中に思考がある。発想が生まれる時は、必ずといってよい程リラックスしている。作品を作り上げてゆくには、多くの人の手とともに、多くの人の中にも借りなければならない。知識に偏ってはいけませんが、経験だけでは思考は胎動しない。たくさんの仮説をたて、たくさんの仮説を楽しみ、大切な仮説を探し出す。自分の目を信じること。自分の言葉で語ること。今を大切に。

飛坂基夫先生
(建築材料実験)

著書

コンクリートの試験方法(共著), 骨材試験のみどころ・おさえどころ(共著), コンクリート技士受験者のためのQ&A(共著)他



高強度コンクリートを中心に建築材料の研究を実施してきました。材料実験で重要なことは、実験する前に得られる結果を予測することです。予測したとおりになれば正しい結果が得られたと考えられます。予測した結果と異なった場合には、実験結果が間違っていたか、既往の研究で明らかにされていない新しい事実が発見されたかのどちらかです。新しい事実が発見されたのであれば独創的な研究を実施することが可能になります。このことは、実験や研究に限らず人生一般に通じることと考えています。参考にして下さい。

徳山英邦先生
(会計学)



「駿河課長、今度A物産が企画しているプロジェクトを受注しようと思うのですが、A物産の財務状況は、いかがなものでしょうか。食い込むべきでしょうか」そんな相談に直面したとき、建築のプロとなる皆さんも、会計の学習の必要性を実感するのかもしれない。会計は、ある存在の社会活動を、貨幣数値で把握する行為ですが、現金だけを見るのではなく、それ以外の価値物の流入入をも捕捉します。将来のその日のために、一緒に学びましょう。

小嶋勝衛教授監修による『都市の計画と設計』（共立出版）が発行された。根上彰生助教授，宇於崎勝也専任講師ほか海洋建築工学科，工学部，生産工学部で都市計画を担当する教員によって執筆されている。

加藤未佳さん（環境・情報研究室D2）は，西安建築科技大学との共同研究の一環としてまとめた原著論文「ライトシェルフを用いた竈洞の光環境改善に関する研究」が，日本建築学会計画系論文集No.556号（2002年6月号）に掲載された。

田所辰之助大専任講師と大川三雄専任講師の共訳による『建築家・吉田鉄郎の「日本の住宅」』（鹿島出版会）が刊行された。建築家・吉田鉄郎は戦後

教室ぶろむなード

における本学建築学科の設計教育を担った人物。建築家としての業績のみならず，伝統的な日本建築にも造詣が深く，ドイツ語による3部作をまとめている。本書は，その中の一つで，1935年にドイツのヴァスマート社から出版され，欧米においてロングセラーとなった名著を翻訳したものである。外国人を対象に，日本の住宅をわかりやすく解説している。

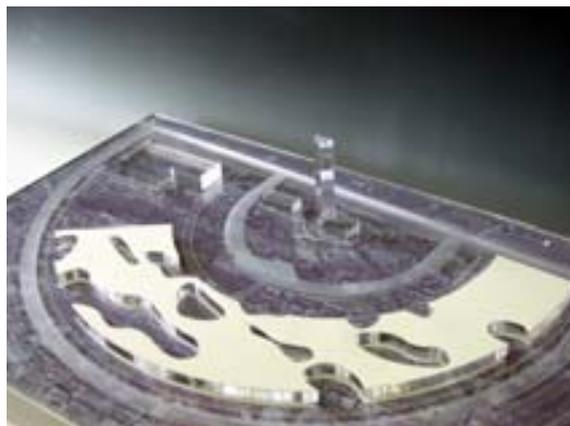
相次いで行われた公開設計競技に，建

築学科OBが入選を果たした。「東村立新富弘美術館建設国際設計競技」（主催：群馬県勢多郡東村）において，建築学科非常勤講師でもある佐藤光彦氏（86年卒業・佐藤光彦建築設計事務所）の案が佳作に入選した。1,211点の応募作からのベスト5。また，優秀賞には，大学院建築学専攻の非常勤講師の飯田善彦氏（飯田善彦建築工房）の案が入選。

「邑楽町役場庁舎等設計者選定住民参加型設計提案競技」（主催：群馬県邑楽町）において，山中新太郎氏（92年卒業）の案が佳作に入選した。335点の応募作からのベスト5。最優秀賞も建築学科OBの山本理顕氏（68年卒業・山本理顕設計工場）。



新富弘美術館・佐藤光彦案



邑楽町役場庁舎・山中新太郎案

駿建目次

（2002.7 Vol.30 No.2 通巻119号）

表紙「西合志町保健福祉センター」
設計：今村雅樹 撮影：今村雅樹

君は建築人として21世紀をどう生きるか	2
学生による授業アンケート調査について	3
西合志町保健福祉センター	4
新1号館建設工事見学会	6
私と建築	7
研究室紹介	
対震構造研究室	8
建築史・建築論研究室	9
新任非常勤講師紹介	10
教室ぶろむなード	12

『駿建』 発行者・片桐正夫：千代田区神田駿河台1-8-14 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
平成14年度編集委員：本杉省三・根上彰生・重枝 豊・渡辺富雄・石垣秀典・佐藤慎也・佐藤直樹 印刷：奥村印刷株式会社